ひと

尊厳死の法制化を訴える日本尊厳死協会専務理事

松根敦子さん（71）

本人の意思があれば延命治療をしない尊厳死。その法制化を求める活動を、日本尊厳死協会が約20年ぶりに再開した。先頭に立って動き回る。議員を訪ね歩き、各地で講演し、署名も呼びかける。

昨春から専務理事。今年、国会の代表質問で法制化が取りあげられ、国の検討会が延命治療中止の際のルール作りを求める報告書をまとめた。「風が吹いている」と感じ、夏から本格的に動きだした。

約30年前、夫の両親を相次いでみとった際、病院で機械につながれ、「死ぬに死ねない患者」を目にした。「治る見込みがないなら自然に死にたい」と夫と協会に入った。

7年前、末期の咽頭がんと診断された夫は、緩和ケアを受け在宅で過ごした。好きな酒を吸い飲みですすり、葬儀や墓のことを話し合った。穏やかな最期の日々だった。

一人住まいの、自宅玄関にプラカードを掲げる。来客は、ぎょっとするに違いない。〈気を失っていても絶対に蘇生させないで下さい。死にそこなうことは死より何よりいやなのです〉

心肺蘇生拒否の意思表示だ。同じ文を書いたカードも肌身離さず持つ。「意識なくなったら何されるか分からないから自己防衛なの」

生きている間は「精いっぱい見て感じて動きたい」。ジャズやロックのライブにも出かける。2時間総立ちもへっちゃらだ。

文　平塚　史歩
写真　中村　慎吾